

都市近郊農村における「半居住者」の果たす役割

The Characteristics of "Semi-Residents" in Rural Areas Near Urban Regions

○本石雄大* 東口阿希子** 星野 敏***

Yudai Motoishi, Akiko Higashiguchi, Satoshi Hoshino

1. 背景

農村地域での人口減に対し、定住人口の増加策に加えて、住民・非住民を問わない外部人材の地域活動への活用が進められてきた。近年は特に非住民を参加させる動きが活発化しており、担い手としての外部人材の中心はかつて住民だった非住民、すなわち他出子弟から外部の非住民へと移ってしまった。

貴重な非定住の担い手である他出子弟に関する既往研究は、対象が条件不利地域に偏っており、都市近郊農村においても同様の人口減少とそれに伴う人手不足の問題は発生している一方、担い手となる他出子弟の存在については未だ明らかにされていない。

農村における居住形態は多様化し、住民・非住民の枠にとらわれない居住と地域維持への関与が進んでいる。こうした状況において、定期的な帰省・訪問者のような移動する人材への着目は、農村部の集落機能の維持に資する意義が大きい。都市近郊農村においても、兼業化や離農の進行により住民単独での地域維持が困難な現状が指摘されており、完全な外部者でない他出子弟の果たす役割と活用可能性の解明には一定の意義がある。

2. 目的

本研究は、都市近郊農村における他出子弟が家庭内や地域内で果たす役割および居住者から担うことを期待される活動を把握することを目的とする。また、既知の条件不利地域における他出子弟との比較から相違を検討する。現状と傾向を踏まえ、都市近郊農村における地域維持活動の担い手としての他出子弟の活用の方向性を検討する。

3. 方法

3.1 研究対象地

研究対象地は神戸市西区神出町広谷とする。人口は 65 世帯 128 名で、西神ニュータウンに近く交通は至便であり、近隣には工業団地が多数立地している平地農業地域にである。高齢化率は 65%で人口減少と高齢化が進行しており、耕作放棄が増加しつつある。これを背景に令和 6 年度から神出町の祭りへの参加を取りやめるなど集落機能の維持が問題となっている。

3.2 調査方法

2024 年 9 月から 10 月にかけて、広谷地区全世帯を対象として他出子弟の存在状況・属性・現在行っている活動について尋ねるアンケートを行った。回答者は各世帯の世帯主で、有効回答数は 41 世帯、有効回答率は 80.3%であった。

居住世帯に対しては 2024 年 10 月に広谷地区の 4 つの隣保から最低 2 名ずつとなるよう自治会長の選んだ親世代の 9 名に対し他出子弟および子世代の居住者に対する活動の期待について、日程上聞き取り調査が可能であった子世代 3 名と明石市居住の他出子弟 1 名に対し現在の活動実態について半構造化インタビューを行った。聞き取りでは、居住世帯と他出子弟の属性、他出子弟の帰省・訪問頻度とその目的、居住者が他出子弟に対して期待する活動、居住者と他出子弟の現在の家庭内と地域での活動状況について尋ねた。

*福岡県庁 **京都大学大学院地球環境学堂 ***一般社団法人ため池みらい研究所

*Fukuoka Prefecture **Kyoto University Graduate School of Global Environmental Studies ***Tameike-mirai Institute

キーワード：社会計画、集落計画、農村振興

4. 結果

他出子弟がいると回答した世帯は 41 世帯中の 20 世帯とほぼ半数に及んだ。他出子弟の帰省・訪問頻度については、全体の 37.5%にあたる 18 名が 1 か月に 1 回以上という高い頻度で帰省・訪問を行っていることが明らかになった。既知の中山間地域や過疎地域における他出子弟とは異なる帰省・訪問傾向を示す集団であるため、本研究では帰省・訪問の頻度によって他出子弟を 2 つのグループに分け、そのうち 1 か月に 1 回以上の高い頻度で帰省・訪問を行うものを「半居住者」として定義した。

半居住の他出子弟がいる世帯といない世帯の他出子弟への期待を比較すると、半居住の他出子弟がいる世帯は自治会活動への参加といった地域活動、農繁期以外の農作業手伝いへの期待がそれぞれ平均 2.42, 3.33 と、いない世帯の 1.20, 1.67 に比べて高いということが明らかになった(図 1)。

他出子弟の帰省・訪問の目的として休憩や家族団らんなどの「自身のための帰省」や特に目的のない帰省が 25%程度挙げられた。半居住者とそうでない他出子弟の帰省・訪問の目的を比較すると、家庭内手助け・農繁期の農作業・特に目的のない帰省の項目では半居住者がそれぞれ 22.2, 23.1, 27.8%と、そうでない他出子弟の 0.0, 7.1, 10.0%よりも高い割合を示した(図 2)。

聞き取り調査からは、半居住者が実家世帯の農業労働力を補完しているほか、目的のない帰省が実家世帯に安心・信頼感を与えていること、果たす役割は子世代の居住者に近いことが明らかになった。

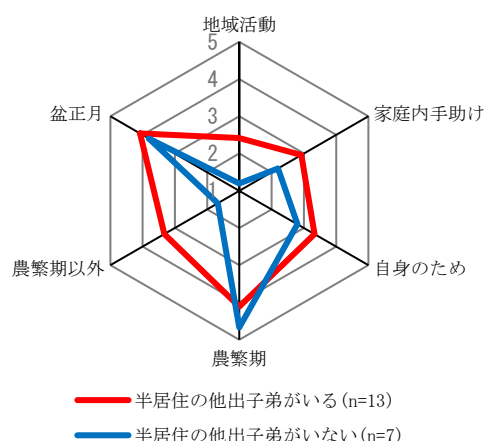


図 1 他出子弟に対して期待する活動
1: なくてよい 5: してほしい

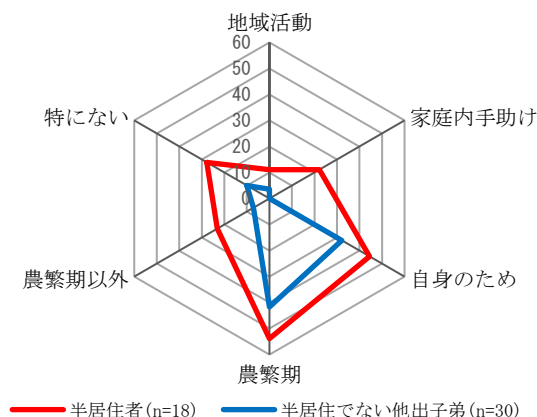


図 2 他出子弟が担う活動(選択%)

5. 考察

都市近郊農村では近隣地域に居住し頻繁に出身集落への帰省・訪問を行う半居住者が存在していることが明らかになった。その活動実態は半居住でない他出子弟よりもむしろ居住者に近い存在であるといえる。広谷地区で半居住者が一定数存在できた要因として、平地農業地域でありながらも幹線道路が通っており周辺に複数の工業団地があるという地理的特性により、他出者が周辺地域にとどまりやすいということが考えられる。

中山間地域や過疎地域においてこれまで研究対象となってきた他出子弟は農繁期の農作業や年に数回の行事への参加といった役割を担うことが多かったが、都市近郊農村における半居住者はこれに加えて日常的な農作業の手伝いや家庭内の手伝いといった幅広い役割を担っている。このことから、半居住者は世帯単位での活動を居住者に近い立場で担える人材、実家世帯に安心感・信頼感を与える存在としての活用が期待される。また、都市近郊農村において世帯単位で平時の農業労働力となっている半居住者は、草刈りや地域共同での管理作業といった農地保全のための組織的対応への参画素地があると考えられる。すなわち「世帯主の代わりに草刈りに出る」のように、家庭内の役割の延長として地域レベルの活動への関わりを持つことで、半居住者を組織的対応に組み込むことが期待される。また、今後他出子弟を地域活動維持の担い手として活用するためには、地域活動のうち住民だけしか担えない役割とそうでない役割を明確化することが重要となる。自治会活動のような共同活動の中心部に半居住者を組み込むには地域住民のコンセンサスが必要である。